

第4回 人と自然の共生国際フォーラム 開催報告

「第4回人と自然の共生国際フォーラム」は、2010年9月12日・25日にフィールドワークを、10月16日・17日にフォーラム本体を開催しました。フィールドワークは、瀬戸市海上の森と知多半島で実施し、生物多様性の保全活動等にかかわっている現場を見学しました。続いて10月16・17日に愛知県産業労働センター（ウインクあいち）でフォーラム本体を開催し、今回は生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）開催を絶好の機会と捉え、生物多様性への関心の輪を広げ、その保全活動につなげていくとともに、森林・里山の価値や役割を広く発信するためにどう行動していくべきかについて、様々なプログラムを通じて参加者と一緒に考えました。

テーマ：生物多様性から人と自然の共生を考える
～COP10に向けて森林・里山からの発信～

日時：平成22年9月12日（日）・25日（土）
場所：海上の森（瀬戸市海上町他）、知多半島（知多郡武豊町・美浜町）
日時：平成22年10月16日（土）・17日（日）
場所：愛知県産業労働センター（ウインクあいち）
（名古屋市中村区名駅四丁目4-38）

●フィールドワーク

9/12（日）海上の森コース ————— 10:00～16:00
9/25（土）知多半島コース ————— 10:00～16:00

●フォーラム本体

10/17（日）
「生物多様性」活動事例発表会 ————— 10:15～12:15
開会式 ————— 13:00～13:20
基調講演 ————— 13:20～14:30

「里地・里山と生物多様性」
講師／武内 和彦

パネルディスカッション ————— 14:45～17:00
「生物多様性から人と自然の共生を考える」
～COP10に向けて森林・里山からの発信～
コーディネーター／川井 秀一

パネリスト／武内 和彦、香坂 玲、宇根 豊
コメンテーター／マリ クリスティヌ

コカリナ演奏 ————— 17:00～17:30
フォーラム宣言・閉会式 ————— 17:30～17:40
交流会 ————— 18:30～20:00

10/16（土）・17（日）
ポスターセッション ————— 10:00～16:00



開会のことば

青木 章雄
実行委員会副委員長
愛知県農林水産部農林基盤担当局長



主催者あいさつ

小川 悦雄
実行委員会委員長
愛知県副知事



マリ クリスティヌ

あいち海上の森センター
名誉センター長



来賓祝辞

奥村 悠二
愛知県議会副議長



西郷 正道

農林水産省大臣官房
環境バイオマス政策課課長



松井 栄

中部森林管理局名古屋事務所
副所長



田村 省二

環境省中部環境事務所
統括自然保護企画官



閉会のことば

井桁 正人
実行委員会作業部会長
愛知県農林水産部技監

フィールドワーク

フォーラム本体に先がけて実施した「生物多様性体感ツアー」には、併せて約100名の参加がありました。海上の森コースでは、海上の森に残る貴重な自然と、里の再生活動を見学しました。知多半島コースでは、知多半島の各スポットを巡り、生物多様性保全のための様々な取り組みについて理解を深めました。

「生物多様性体感ツアー」

海上の森コース

行程表

海上の森入口駐車スペース 【出発】

↓
市道沿いに見られる自然を観察

↓
ふれあいの里

- ①昨年度、県民参加により草地から再生した水田を見学。
- ②2グループに分かれて行動
 - ・海上砂防池やサワギキョウが咲く湿地で自然観察。
 - ・里の再生作業に参加し、稲架(はざ)杭作りを体験。

↓
ため池

修景作業を行っているため池を見学。

↓
森の中の自然を観察

(森林、ムササビの巣箱、貧栄養湿地、三角点)

↓
海上の森入口駐車スペース 【到着】【解散】



知多半島コース

行程表

知多半田駅 【出発】

↓
吉町田湿地(知多郡武豊町)

愛知県が天然記念物に指定し、保全活動が進められている湿地を見学。

↓
武豊町歴史民俗資料館(知多郡武豊町)

吉町田湿地の写真展と、武豊町の歴史・民俗に関する展示を見学。

↓
河和九十九の里(知多郡美浜町)

川・池と田んぼを結ぶ水田魚道の設置や、竹炭づくりにも取り組んでいる現場を見学。

↓
鵜の山(知多郡美浜町)

国指定天然記念物で、かつて肥料として鵜の糞が採集された歴史を持つ「鵜の山」でカワウを観察。

↓
知多半田駅 【到着】【解散】



活動事例発表

ファシリテーター	COP10なごや生物多様性アドバイザー／ピオトープを考える会 会長 長谷川明子
活動事例発表者	①認定・NPO法人の木の 理事 福島和彦
	②トヨタ自動車(株)「トヨタの森」社会貢献推進部 プロフェッショナルパートナー 池上博身
	③矢作川水系森林ボランティア協議会 副代表 稲垣久義
	④あいち自然環境団体・施設連絡協議会(あいち自然ネット) 会長 宮永正義 ほか9会員

〈フィールドワーク結果報告〉

人と自然の共生国際フォーラム実行委員会事務局

青山 義明(あいち海上の森センター)

今年、フォーラム本体よりも前の9月12日と25日に、一般参加者を募集して、瀬戸市海上の森と知多半島でフィールドワークを実施しました。1回目の海上の森コースでは、自然観察指導員の説明を受けながら自然観察をしたり、海上の里で行われている里の再生活動を体験したりしました。2回目の知多半島コースでは、愛知県指定天然記念物となっている武豊町の菅町田湿地や、川や池と田んぼを生き物が往来できるように水田魚道で結ぶ取り組みや竹炭作りを行っている美浜町の河和九十九の里、かつて有用な資源としてカワウの糞を肥料に利用していた美浜町の鶴の山を見学しました。

参加者からは生物多様性が実際は身近なことであることが分かったという意見をいただきました。今後は生物多様性に関心のない方にも来ていただけるようにすることが課題だと思います。

〈活動事例発表〉

認定・NPO法人の木の

理事 福島 和彦(名古屋大学教授)

「オの木」は、日本木材学会という学会の地球環境委員会を母体として作られました。市民、研究者、企業、行政、さらに日本木材学会と連携し、木づかい、森づくりの環境教育ネットワークづくりに取り組んでいます。我々は教育、事業、IT、イベントの4つを柱に仕組みづくりをしており、川上から川下まで、あるいは木材利用と教育といった視点などからシンポジウムなどを各地で開催しています。仕組みづくりでは行政も民間も同じ志であるべきだろうという立場に立っています。生物多様性は保全と持続可能性がセットでなければならぬと捉えています。

トヨタ自動車(株)「トヨタの森」

社会貢献推進部 プロフェッショナルパートナー 池上 博身

トヨタ自動車(株)では「人と自然との共生」を基本理念に、持続可能な地球環境の保全を目指し、森づくり・人づくり・地域づくりという三つの切り口からNPO・NGO、行政などと協働で、様々な環境社会貢献活動をグローバルに進めています。

1996年から、本社近くの社有林を使い「トヨタの森」として

里山整備・保全活動をスタートさせました。整備した里山は一般開放し、自然ふれあい体験学習の場となっています。また、その活動拠点施設として「里山学習館 エコの森ハウス」を2003年に建設しました。1998年から2007年の10年間にわたり「エコモニタリング」として樹木の成長量と種の多様性の二つを調査し、森林のカーボン蓄積量などを明らかにしました。2008年度からはエコモニタリングの成果を活用した「フクロウの棲む森づくり」にも取り組んでいます。また、2002年度から、専任のインタープリターによる五感を用いた自然ふれあい体験学習指導を実施し、年間7千人以上の学童が参加するなど、豊かに回復した里山自然の活用を進めています。

矢作川水系森林ボランティア協議会

副代表 稲垣 久義

森で一番荒れているのは人工林です。そこで、流域全体の人工林の状況をきちんとしたデータを元に把握していこうということで2005年から「森の健康診断」をスタートさせました。研究者なども含めて作った全国共通の調査マニュアルに沿って調査しています。簡単な道具を使っていますがデータは学術的に高く評価されています。過去6年間で約400カ所を調査しています。

矢作川から全国へということで開催し、出前授業も行い、子どもたちにも参加してもらっています。子どもたちには実際に森の中へ入って五感で森を感じてもらおうようにしています。また、森の中から上を見て、さらに間伐することによってどうなるかを体験してもらいます。たった1本の木を伐るだけで大きな空間が現れます。それによって芽を出したばかりの木が枯れずに育つということを実感してもらいます。こうした活動は今後全国へと広がるでしょうが、講師が足りないという悩みがあります。

あいち自然環境団体・施設連絡協議会(あいち自然ネット)

会長 宮永 正義(海上の森野鳥の会)

あいち自然ネットは現在44団体で構成されています。会員から簡単な紹介をしてもらいます。

愛知県ネイチャーゲーム協会／青山 裕子

ネイチャーゲームの特徴は見る、聞く、触る、嗅ぐ、自然に親しむです。目的は自然に気付くこと、周りの人と一緒に感動し、分かち合うことです。子どもたちが自然を先生にして、自然を感じてもらおうなどの活動をしています。

ART&LIFE自然学校／青柳 博樹

私たちはモノづくりを手段としてプログラムを実施し、作る楽しみや物を大切にすることを伝えています。自分たちのフィールドはありませんが、呼ばれればどんな所へも出かけます。

NPO法人海上の森の会／山川 一年

2005年の万博前夜に創立しました。現在12のグループがあり、海上の森の保全と活用のため、様々な取り組みを行っています。今一番力を入れているのがため池の再生です。ぜひ、ご参加ください。

NPO法人親水会／伊藤 光宏

里山、里川、里海をフィールドにして、楽しみながら自然を学びたいということで5年ほど前に結成しました。自然観察会、工作などでいろんな生き物が助け合って生きていること、広い川から身近にある川や海まで、全部つながっていることをこれからの若い方に伝えていき、環境変化に気付く感性を養ってもらいたいと思い活動をしています。

NPO法人渥美半島ハイキングクラブ／鈴木 一敏

私たちは2002年春、渥美半島を三河湾から太平洋へ抜けるコースを整備するために発足しました。現在は「あつみトレイル」と呼ばれ、三河湾国定公園の指定区域内にあり、自然が色濃く残っています。今年の春にはガイドブックもできました。現在は自然環境保護、町づくりの推進などの活動もしています。

あいち海上の森センター／青山 義明

愛知万博の瀬戸会場にあった愛知県館を利用した県の施設です。残された海上の森を森林や里山の学習の場の拠点として使っています。その中に、ドイツで行われている「森の幼稚園」という園舎のない保育活動をイメージした幼児森林体験フィールドがあります。幼児期からの森林体験を進めたいと思っています。

みどりのまちづくりグループ／山川 喜隆

春日井市内を流れる大谷川の源流から小野道風生誕地までの約14キロを20年間かけて緑の回廊でつなげようと平成14年に会を設立しました。大谷川源流にはこれまでに2,500本のドングリの木を植樹し、人工林の除伐や間伐の体験、野球のバットに使う木の植樹も行いました。庄内川では年に数回のごみ拾いや草刈りなども行っています。

持続可能な豊かな社会をつくるネットワーク／鶴岡 朗

私たちが考える持続可能な社会は、ヒト・モノ・カネのバランスが取れた地球に優しい社会です。それは水と食とエネルギーであり、その大切さを学ぶ環境教育プログラムを実践しています。私たちはエネルギーの地産地消も考えています。また路面電車復活の声がどれ位あるのかといった調査研究も行っています。

平針の里山保全協議会／宗宮 弘明

平針の住宅地の中に、島のような形で残されている里山があり、ここには100年前からの田んぼやため池が残されています。現市長は残すことに賛同してくれましたが、いろいろな問題があり、開発許可がおりてしまってます。次の世代のためにこの里山を残したいとの思いで運動を続けています。

海上の森野鳥の会／宮永 正義

趣味の中でも一番お金がかからず、生産性がなく、体力を使わず、ただ鳥を見て帰ってくるだけの会です。最近はバードウォッチングなどとかっこいい名前が使われることもあります。誰でも気軽に参加できるので、ぜひ来てください。

《発表後のディスカッションのまとめ》

ファシリテーター 長谷川 明子

シーソーの片方に何人か乗り、一人ずつもう片方へ移動していった時、ある時点で一気に大きく動き始めます。今年がそのシーソーの転換点のように、生物多様性という視点を軸においた行動に向かう年であって欲しいと願っています。本日この場に参加された方がとにかく変えようという気持ちを持っていただければいいなと思っています。

今回のまとめとして、皆さんのネットワークを横軸に、それをもっと強化していこうということ、新たな社会の仕組みを考える手だてを作るということがあったと思います。新しい場づくりにより、行政の縦軸と市民をつなぐ横軸で何かを作っていくということ。生物多様性は生き物を守るということだけではなく、私たちの暮らし全てにかかわってきます。薬も食べ物も衣食住全て生物多様性に支えられています。皆さんがそれぞれの場で、自然との共生をどのようにしていったらいいのか、自分たちの場で何ができるのかを、1)自分たちでそれぞれ考えていく、2)それに向けての行動を促していく、3)分からないことに関しては聞ける(話し合える)場をつくっていくというようなことを、今回の人と自然の共生国際フォーラムの中でフィールドワークと事例発表から提案という形で出させていきたいと思っています。(会場より全員賛同の拍手)皆様の拍手は、皆様がそれを実行するというでもありませんから、ぜひ今日からのその一歩を始めていただきたいと思っています。どうもありがとうございました。



「里地・里山と生物多様性」

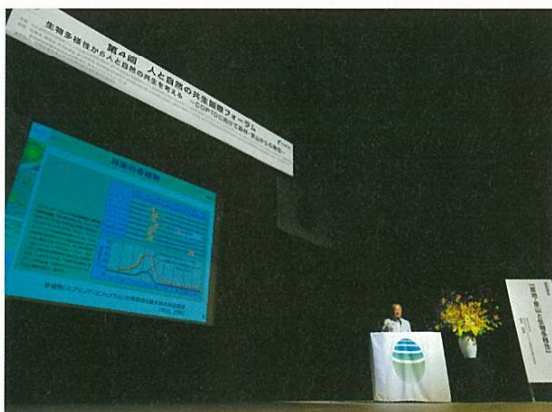


講師：武内 和彦（たけうちかずひこ）

国際連合大学 副学長・東京大学サステナビリティ学連携研究機構 副機構長

東京大学大学院農学系研究科修士課程修了。農学博士。1997年に東京大学大学院農学生命科学研究科教授に就任。2005年よりサステナビリティ学連携研究機構副機構長、2008年からは国際連合大学副学長を兼務。2005年開催の愛・地球博では博覧会協会企画運営委員、「愛知万博検討会議（瀬戸会場地区を中心として）」委員を務めている。緑地環境学、地域生態学が専門で、生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）では日本政府が提唱し採択された「SATOYAMAイニシアティブ」の策定を主導した。

■消えつつある中で広がった言葉「里山」



「里山」は江戸時代からある言葉ですが、今のように社会の中で広く使われるようになったのは、長らく京都大学で森林生態学を教えておられた四手井綱英先生です。元々は農用林を里山と呼んでおり、里山という言葉がじょじょに社会に広がっていきましたが、それがいまのように重視されるようになったきっかけには、里山そのものが消えつつある状況への危機意識があったと思います。里山が消えつつある大きな原因の一つは、燃料革命によって薪が石油に代わり、それまで農業や生活にかかわる大切な場所だった里山が、人の生活から離れる存在になってしまったことです。もう一つの大きな原因は、経済成長とともに都市が拡大し、国をあげて進められた住宅開発により、里山がニュータウンのような住宅地に転換されていったことです。

里山における人間と自然のかかわりは、非常にユニークな生物の豊かさを守ってきました。ところが人の手が里山から離れることによって、そうした生物相が維持できなくなりはじめています。それをどうするかという新しい課題に、いま私たちは直面しているのです。

■里山という資源を循環型社会につなぐ

私が最初に里山を研究しはじめた頃は、林を切ると言う、「あなた方は自然を保護すると言っているが、自然を破壊するのか」とずいぶん怒られたことがあります。それで何度も何度も繰り返し、「私たちは原生的な自然に対して手を入れると言っているのではありません。里山的自然というのは人の手が適度に入ることによって維持されてきたものです。もし、そういう自然が大事だとすると、どうやって手を入れ続けるかを考えていかないといけないのです。」とお話をして、今では皆さんに理解していただけるようになりました。

里山の生物は種類が非常に豊かです。その豊かさの理由は、森林性の動植物だけではなく、草原性の動植物も入ってくるところにあります。水田や、里山と谷津田の間の刈り取り草地といった環境でも、全く別の動植物が生息するようになり、多様性をより豊かにします。しかし、こういうものを維持するのは、過疎化・高齢化などにより非常に難しくなっています。皮肉なことに、ニュータウンに住んでいる人たちは、もともとは里山を壊して移り住んで来たのですが、その人たちがむしろ今では、ニュータウンの周りにある里山を大事だと思って、多くの人たちがボランティアとして里山の管理活動に参加しているのです。

しかし日本の国土の中で里地・里山の面積は4割程度に達しており、これらをすべてボランティアなかたちで管理していくのは無理です。それゆえ、私たちは、もう一度里山を資源として見直し、日本の林業や農業の振興と結びつけ、あるいは新しいバイオマス利用を考えていき、それを循環型社会につなげられないかと考えています。今、中央環境審議会の中で、循環型社会をつくる一つの考え方として、身近で生産できるものは身近で生産することで、地域の自立性、持続性を高めていこうとする「地域循環圏」の概念が提案されています。ここで循環圏形成の大きなカギとなるのは、異なる主体

の水平的な連携です。お互いに対等な立場で手を取り合っ
て、地域全体の中で資源を最大限有効に活用していく社会
の仕組みづくりをしていくことです。みんなで共同管理をして
いく仕組みを考えていくことが大きなテーマになります。

■SATOYAMAイニシアティブの発想

里山では、昔は人間と自然のバランスが取れていて、今
は人間と自然のバランスが壊れているように思われますが、
実はそうではないのです。とりわけ江戸の後期から明治の
初期にかけては、里山を使いつくし、はげ山になって、土が
山から流出するという状況が普通でした。大きな時間軸で
見てみると、実は里山というのは人間と自然のダイナミックな
関係であって、時には利用が過度であることが、時には放置
されることが問題になるのです。

そこで私たちの意思として、これから新しいバランスを求め
ていくことが、世界に発信できる内容になると考えたのです。
こうした考えに基づいて、10月19日(火)にはCOP10のサイド
イベントとして、SATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシ
ップを立ち上げることになったのです。

里地・里山の再生が、新たなコモンズの創造を通して、新
しい地域社会づくりにつながっていくと私は考えております。
SATOYAMAイニシアティブでは、公私の二項対立を越え
て、みんなで里地・里山を管理し、みんなで地域をよくしてい
くための新しい地域管理の仕組みづくりにつなげることが重
要です。

また、私たちが長年にわたって築いてきた自然とうまくつき
あう知恵を最大限生かしつつ、新しい技術や社会の仕組み
を付加して、望ましい地域づくりを行っていく必要があります。
私たちは、それを伝統的な知恵と近代的な知識の融合と言
っていますが、これもSATOYAMAイニシアティブで強調し
ていることです。

里地・里山は、社会と生態系の複合システムからなる動的
なランドスケープです。それは人間の福利にも大きな影響を
与えています。そのような観点から、里地・里山の概念を広げ
ていくと、最終的には「社会生態学的生産ランドスケープ」と
いう言葉で表現される、人が自然とうまくかかわりながら農林
水産業を中心とした生産を維持していく仕組みとなります。
この言葉をキーワードにして、世界の人たちと一緒にイニシア
ティブを展開していこうとしているのです。それぞれの国の社
会生態学的生産ランドスケープをぜひ見つけてもらい、そこ
でも問題を共有することを通じて、一緒に問題解決の道筋
を探っていきたいと思っています。

SATOYAMAイニシアティブは、近代化社会がもたらした
マイナス面の克服にもつながると考えています。こうした発想
は、これから持続可能な開発を進めようとする途上国にも必
要な考え方なのではないかと思えます。

■開発途上国とともに目指す生物多様性の回復

最近、ブラジルの人たちと一緒にアグロフォレストリーに関
するシンポジウムを開催いたしました。ブラジルのアマゾンで
は、農業開発の結果、土壌侵食が引き起こされ不毛地化し

た土地の再生に、このアグロフォレストリーという仕組みを使っ
たのです。不毛地を再生する際に、ただ樹木を植えるだけで
はなく、パンパイヤやコーヒーなどといった食べられる有用な樹
木や灌木を植えるのです。それによって、生物相は豊かになり、
そして、一つ一つは少量ですが付加価値を高めることで
経済的にも成り立つ生産の仕組みをつくっているのです。

このアグロフォレストリーの仕組みでは、例えば、コーヒーを
売る企業、ジュースを売る企業、医薬品を売る企業など、異
なる企業が連携してアグロフォレストリーを支援する仕組みが
重要になります。そのため、従来とは異なる企業の連携が必要
で、それなしにはビジネスモデルとして成り立たないと聞き
ました。これは私たちが、里山で新しいコモンズの必要性を
考えていることと同じです。

途上国の人たちは、地域の生物多様性を生かして、食料
や医薬品などを開発し、地域社会を豊かにしたいと望んで
います。そうすると、生物多様性の減少をまねかずに、人間
社会を豊かにするような開発をいかに進めていくのかという
ことになります。これが、持続可能な開発と言われるもので
す。それを実現するには、人間が使いながら自然が守られる
という仕組みが大事です。つまり、里地・里山的な考え方に
基づく事業展開を途上国で実践することによって、最終的
には、世界の生物多様性の回復という大きな目標にも貢献
すると考えています。

残念ながら日本の国際的な学術的地位は低下しはじめ
ており、これから世界で切磋琢磨しながら活躍する若い人
材が育っていくのか、大きな不安があります。その意味で
COP10は、私たちに与えられた大きなチャンスだと思います。
とくにCOP10では、IPBESという生物多様性と生態系サー
ビスについての政府間プラットフォームの創設が提案されるこ
とになっています。こうした場を通じて、日本の人たちが積極
的に情報を世界に発信することが望まれます。



パネルディスカッション

テーマ 生物多様性から人と 自然の共生を考える

～COP10に向けて森林・里山からの発信～

パネリスト 武内 和彦

基調講演講師



パネリスト 宇根 豊

農林水産省生物多様性戦略検討会委員
長崎県島原市生まれ。福岡県の農業改良普及員時代の1978年より減農薬運動を始める。1989年に新規参入で百姓になる。2000年に福岡県庁を退職してNPO法人「農と自然の研究所」を設立。2010年4月まで活動を続け、百姓仕事を通じて、人と自然の関係を表現してきた。農学博士。



川井:まずはじめに、午前中に行われました活動事例発表会の報告を、COP10などや生物多様性アドバイザーで「ビオトープを考える会」会長の長谷川明子さんからお願いいたします。

長谷川:午前中に活動事例発表会があり、フィールドワークの報告と、活動されている団体、企業からの事例発表がありました。皆さん、子どもたちに未来を残したい、自然のすばらしさを伝えたい、やれることからやろうという思いで活動を始められています。しかし今の社会では、活動するにも様々な問題があります。そこで三つの提案をまとめていただきました。一つは、取り組みを横につなげる活動を自分たちで始めていきたいと思います。二つめは、予算の付け方などの仕組みを、望む形に変えるための議論の場を作っていくべきだということ。三つめは、今の立ち位置からどのように自然と共生していったらいいかを考えて、今日から行動をおこしていこうということ。この三つの行動をおこしていくことで、いい未来を築いていけたらと思います。

川井:続いて香坂先生、宇根先生より話題をいただきたいと思います。

香坂:COP10は締約国会議ですので、国の代表の方、そして代表の関係者が参加していますが、一般の方々にもこの機会に意識を高めていただけるよう、さまざまなイベントが開催されています。この「人と自然の共生国際フォーラム」も、そうしたものの重要な原動力となり、今スタートしようとしている里山の国際イニシアティブの議論や、共生という日本の概念をどのように国際的に発信していくのかについて、COP10の重要な後押しをしていただけたと考えております。里山の議

コーディネーター

川井 秀一

(かわいしゅういち)

京都大学生存圏研究所 教授
認定・NPO法人才の木 理事長

日本木材学会会長、日本材科学会副会長を歴任するなど、林産科学・木質工学の分野で数々の業績を残している。木材利用の普及啓発活動にも積極的に取り組み、日本木材学会の「日本の森を育てる木づかい円卓会議」を前身とした「NPO法人才の木」を立ち上げ、木づかい、森づくりの環境ネットワークづくりに取り組んでいる。



パネリスト

香坂 玲

(こうさかりょう)

名古屋市立大学准教授
COP10支援実行委員会アドバイザー

東京大学農学部卒業。同大学院修士課程修了。イースト・アングリア大学(英国)で修士号、フライブルク大学(ドイツ)で博士号取得。2006～08年に国連環境計画生物多様性条約事務局に勤務。COP10支援実行委員会のアドバイザーを務めるほか、国連大学高等研究所(UNU-IAS)の客員研究員(Visiting Researcher)として、里山評価やCOP10事業にも取り組む。



コメンテーター

マリ クリスティーナ

COP10広報アドバイザー

あいち海上の森センター名誉センター長

父親の仕事にともない4歳まで日本で暮らし、その後イギリス、アメリカ、イラン、タイ等諸外国で生活。上智大学国際学部比較文化学卒業。大学在学中に芸能活動も開始。94年東京工業大学大学院理工学研究科社会工学専攻修士課程修了。現在も都市工学を学んでいる。生まれながらの環境から学んだ幅広い視点から国際会議・式典等の司会、講演活動を多数こなす。



論と裏表の関係にあるのが都市部での生態系サービス、あるいは自然からの恵みですが、これをどのように考えていくのかについて、少し議論を深める必要があるかと思えます。都市部の拡張によって里山がなくなっていくという意見がある一方で、都市と農村が連携して、里山を保全していける形に考えることが重要だという意見もあり、どのように考えていくのかがいいか、議論することが重要だと思えます。

宇根:農林水産省は生物多様性戦略を策定し、その中で農業は生物多様性を生み出し、生物多様性に支えられているんだからこそ、農業は生物多様性を守っていかなければならないと明確に言っています。だけど現実の政策はほとんど進んでおりません。なぜかといえば、百姓自身の発想法が従来の農業観にとらわれている、あるいは国民の農業を見るまなざしが、農業の生産物の一つとして生物多様性を認知していると思えないからです。

生物多様性について、科学的な分析は今後もかなり進んでいくでしょうが、伝統的なまなざしもこれに呼応して深まっていくのかといえば、疑問があります。人間と自然との付き合いから生まれたいろんな関係、感覚、文化を生物多様性の中に組み込まないと、生物多様性は百姓のものに、あるいは一人一人の人間の心の中に入っていないかという気がします。

昔の百姓は今の百姓の何倍もの田んぼの生き物を知っていました。手植えていけば毎年見ていたはずの生き物も、田植機からでは見ることができず、生き物との距離は離れてしまいます。そうしたことはやむを得ないと現代社会は切り捨ててきましたが、それではいけないと生物多様性が提起している、そう受け取るべきではないでしょうか。

生き物に対するまなざしを、外側からの知恵も借りながら、内側からのまなざしをもう一度取り戻していく、百姓が内側から押し返してその実りを都市生活者にも届けていく、そういったことができないだろうかと考えています。そして生物多様性の概念が百姓にどこかでストンと落ちるのではないかと期待しています。

川井:3名のパネリストとコメンテーターによる議論を深めていきたいと思えます。

香坂:COP10では、2020年、2050年に向けてどういった生態系、方向性を持って行くのかというターゲットが話し合われています。2010年目標は残念ながら達成は厳しいと指摘されており、保護区の改善やODA予算は改善傾向にあります。実施局面ではどのような管理が行われているのかについてまだまだ課題が残っています。遺伝資源へのアクセスと利益配分についても悲観的な見方をされがちですが、希望を持って会議が運営されることを願っています。

武内:生物多様性は違うこと自体が大事で、一つの基準で測れないことこそが価値であり意義であることを、説明できないといけません。2010年目標は、生物種の減少速度を顕著に食い止めるというものでした。そのことが何の意味をもっているのかを市民社会に理解してもらえただけのきちんとした理屈が立てられていなかったのではないかと思います。生物多様性条約では、生物資源の持続的利用をどのように進めていくのかも重要ですが、私たちのSATOYAMAイニシアティブの考え方が広くこの問題に使えるのではないかと期待しています。

生物多様性分野で世界を牽引するリーダーが必要ですが、一人ではなく、多くのリーダーが世界へ出ていき、この問題の重要性を訴えていくべきだと思います。日本ではCOP10を契機に、リーダーシップを発揮できるような人材が育っていくことが、とくに期待されます。

川井:マリ クリスティーンさんからもコメントを頂けたらと思います。

マリ:私はタイの山岳民族の子どもたちの教育支援を行っています。タイの山岳民族は里山に住み、持続可能な形で森を利用し生活していますが、政府や企業から森を追い出されると、街の中では生活がうまくできないため、子どもを売ったり体を売ったりと、大変な思いをして生活することになります。山に薬草が生えていると、採取する権利を山岳民族から奪ってしまいます。そして政府や企業の利益は山岳民族に配分されません。COP10では、先進国が発展途上国から持ち出した資源による利益を発展途上国にも配分するための議論が行われていますが、世界中の価値観、文化、利害関係が入り込んでいて、非常に難しい問題です。

重要なのは、そこにコミュニティーがあるから里山だということです。人々が住み、持続可能なように手を加え、そのための知恵や知識を持ちながら自然に関わるのが里山ではないかと思います。格差をどうやってバランスよくさせていくかは、私たち一人一人の問題です。

川井:名古屋・クアラルンプール議定書は、遺伝子組み換えの植物、生物、食物等、暮らしに大きな関連のあることだと思いますが、補足説明をお願いします。

香坂:今回は、遺伝子組み換え体を輸出した先で生態系に被害が出た時、それを修復する仕組み作りをしていくことに合意したということです。実際に被害があったかについては意見が分かれるところです

が、大事なことは消費者には知る権利があることです。今回をきっかけに、身近な食事や暮らしとのかかわりに関心を持つことが大事だと思います。

宇根:遺伝子組み換え体の生態系への影響は、面白い面を持っています。これまでの近代化技術はいかに生産を上げるかという尺度で評価されてきましたが、生態系や伝統文化への影響についてはほとんど議論されませんでした。田植機を使わずに直播きをしたら労働時間が減り、収量は増えるといった尺度では評価されていますが、田んぼの生き物に対しての影響といった視点はありません。自然界に働きかける技術は生物多様性に影響を与えます。生態系への影響について国内でも真剣に考える時期がやっと訪れたと考えています。

川井:里山イニシアティブに関して共同体としてのコモンズという考え方を導入し、みんなで管理していこうという提案があります。こういう問題はCOP10でどれだけ話し合われているのでしょうか。

香坂:白鳥の交流会場等で行われるイベント等で政府担当者やNGOの方がプリーフィングをしています。ただ、政府に対し地域の科学的情報等をバックに提言するとなると、ある程度大手の国際的で、専門的スタッフがいるNGOでないと難しいところがあります。しかし先住民の団体の代表はいつも参加され、発言してインプットする状況はあります。

武内:SATOYAMAイニシアティブは、2年前から環境省と国連大学高等研究所が連携して進めてきたものです。世界にある里山と同じような問題をみんなが語り合える場をつくることを検討課題として進めてきました。地域の人間と自然の伝統的かかわり方を活かして、豊かな自然と付き合っていく社会づくりを世界の人と一緒に考えていくことになっています。

川井:生物多様性条約事務局のアハド・ジョグラフィ氏は日本の里山は知恵袋だと述べています。自然と共生している日本から、近代的でありながら伝統的、文化的価値観を守ることができるというメッセージを発信して欲しいとも言っています。

宇根先生は農業の立場から里地・里山の管理についてどのようにお考えでしょうか。

宇根:私はみかんも栽培していますが、カエルは山と田んぼを行き来して、田植えの時期には田んぼで産卵します。この時に田植えした田んぼがなかったら産卵場所がありません。

田んぼの畦に野の花が咲いていても、当たり前という感じでしか見られません。でも畦草刈りを行うから咲くのです。百姓の仕事は本来の目的以外のものまで引き出します。除草剤を撒かず、一見遅れたように見える百姓仕事によって生物多様性が育まれている、という外からのまなざしと、内からの百姓仕事と合体する新しい語り方を百姓は身につけなければいけません。

川井:里地・里山は、当面は管理するという立場からボランティアが欠かせません。農業の方からボランティア活動として里地・里山を再生する動きはあまりないということでしょうか。

宇根:農業の側は当然対応していく必要がありますが、最近では外側からのまなざしにも熱いものがあります。阿蘇の草原はほとんどが都会の何千人というボランティアによって草刈りが行われ、美しい景観が守られています。自然に働きかけることが楽しいと言っています。昔のように農業はきつい、しんどいから手伝ってほしいというのではなく、楽しくて、うれしくて、面白いから一緒にやろう、という感じになれば、百姓の可能性が随分開けるように感じます。

香坂:愛知県はどうしても工業のイメージを強く持たれますが、農業大国でもあり、都市部と地域社会の両方が共存していることがこの地域の面白さだと思います。この地域には見るべきところがたくさんあることを国際的ゲストに知っていただきたいと思っています。その中でボランティアの方々の力をすごく頼りに感じます。

マリ:今、海上の森では里山の生活を皆さんに復元して頂いています。里山のイメージを日本の文化から見ると、山や畑ですが、アフリカの子どもたちは茶色と黒と白だけの風景が豊かさのイメージです。それぞれの国に里山があり、文化の違いによって里山の形が違うということはすばらしいことです。皆が持っている生活環境の中での里山暮らしができればすばらしいのではないかと思います。

川井:これまでの議論についてご意見、ご質問、議論等がございましたら手を上げてください。

(会場からの発言)

人と人のつながりの再構築のために、こんな視点が大事だということを示唆を頂ければ幸いです。

武内:これまではコモズ自身の閉鎖性という問題がありましたが、これからは現代社会にふさわしいように外に開かれたものにしていくことが大事です。企業を入れたらどうかと考えているのもその一つです。高齢者が豊かに生きていくために参加しやすい仕組みづくりをすることも大事です。また里山の木を材として、あるいは資源・エネルギーとし

て使い、さらには観光的価値を高めるといった、セットとしての地域社会の仕組みづくりが必要です。また、農林水産業に付加価値を付けていくことも大きな課題ではないかと思います。

(会場からの発言)

子どもたちに伝えることがあれば、一言お願いします。

香坂:白神山地の土の中にある酵母を使った甘いソソが作られるなど、自分たちの身の回りのさまざまな生物が生活に関係しているということを知ってもらいたいと思います。子どもが虫などを捕まえて遊んでいる時に、それは汚いかいって止めさせないようにする事も大事なポイントです。

宇根:子どもたちに、「君たちがご飯を食べるから田んぼが必要になり、そのことでオタマジャクシが生きる場所を確保できる」というロジックを出していてもいいんじゃないでしょうか。生物多様性が経済的な有用性に負けないよう、いろいろな表現を編み出していく責任を負わされているのではないかと思います。

(会場からの発言)

自然体験がなく、言葉だけのエコが多いと思われれます。

武内:里山を利用する仕組みがないため、都市のまわりから里山がなくなり、人々の管理の必要性に対する意識も薄れています。その結果、里山でありながら手をつけない方がよいといった見方にもなっているのです。こうした見方を変えるためには、里山の体験が重要で、子どもたちを含めてみんなが参加を通じて考えていくことのできる場づくりが大事だと思います。

川井:今日は第4回人と自然の共生国際フォーラムにおいて生物多様性から人と自然の共生ということで、COP10を一つの大きなテーマにしなから森林と里山について考える機会になったことを、大変うれしく思います。どうもありがとうございました。

コカリナ演奏

木の種類によって音色が変わる木製楽器「コカリナ」の演奏を、コカリナグループ「メゾフォルテ」の皆さんに披露していただきました。



ポスターセッション

ポスターセッションには、愛知県内で活動する団体・施設で構成された「あいち自然環境団体・施設連絡協議会（あいち自然ネット）」から25ブース、そのほかの団体・施設から17ブースが出展され、前回の37ブースを越える42の団体・施設が、2日間にわたって活動の紹介や参加者との意見交換を行いました。

ブース出展団体・施設 一覧

◆あいち自然環境団体・施設連絡協議会(あいち自然ネット)

ブース番号	団体・施設名
1	あいち自然環境団体・施設連絡協議会(あいち自然ネット)
2	あいち海上の森センター
3	NPO法人 海上の森の会
4	NPO法人 親水会
5	東京大学愛知演習林
6	NPO法人 東三河自然観察会
7	愛知県ネイチャーゲーム協会
8	祖父江のホタルを守る会
9	ART&LIFE自然学校
10	NPO法人心豊かにARLDの会
11	海上の森野鳥の会
12	長久手町平成こども塾
13	NPO法人 表浜ネットワーク
14	戸田川みどりの夢くらぶ
15	NPO法人 渥美半島ハイキングクラブ
16	愛知県自然観察指導員連絡協議会
17	NPO法人 藤前干潟を守る会
18	みどりのまちづくりグループ
19	NPO法人 環境市民 東海事務所
20	持続可能な豊かな社会をつくるネットワーク
21	ネイチャークラブ 東海
22	平針の里山保全協議会
23	大府市自然体験学習施設二ツ池セレクトナ
24	愛知県保険医協会公害対策部
25	NPO法人 犬山里山学研究所
小計	25団体・施設

◆その他県内外の団体・施設

ブース番号	団体・施設名
1	国土緑化推進機構
2	愛知県農林水産部農林基盤担当局 森林保全課 森と緑づくり推進室
3	愛知県森林協会
4	生物多様性条約第10回締約国会議支援実行委員会
5	愛知県環境調査センター
6	認定・NPO法人 才の木
7	矢作川水系森林ボランティア協議会
8	COPI10 SATOYAMA COMMUNITY NETWORK
9	よりあい工房ぼんどり
10	あいち海上の森大学OB会
11	「海上の森」森のようちえん実行委員会
12	トヨタ自動車株式会社「トヨタの森」
13	株式会社 INAX
14	株式会社 ナゴヤキャッスル
15	KDDI 株式会社 中部総支社
16	株式会社 豊田自動織機
17	株式会社 伊藤園
小計	17団体・施設
計	42団体・施設

ポスターセッション会場図

